

誤植の殿堂『説日語』

— その誕生と変遷（十三）

こく ぶ けん じ
國 分 建 志

1. はじめに

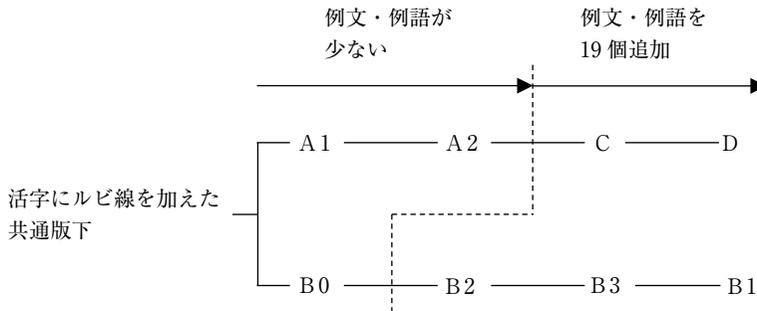
日本語会話集『説日語』には海賊版とおぼしきテキストが多数存在するが、前々稿と前稿（國分 2022、23）ではそのうち風来坊本②を含む f 系テキストに着目し、その例文・例語の特徴や正規版との関係について考察してきた。

本稿でも引き続き f 系を取り上げ、まずテキストの成り立ちについてさらに掘り下げ、次いで複数存在するテキストの個別の特徴や差異、相互の関連性を探った上で、f 系が正規版から誕生しその後さまざまなテキストへ分岐していく姿を明らかにしたいと思う。

2. f 系の由来に対する再考察

『説日語』の正規版には大きく分けて 1992 年李保民編の陝西旅游出版社版（陝西版）と、それを改訂した 1994 年李力保民編の西北大学出版社版（西北版）の 2 種類があり、どちらも何度か改訂がなされている。あまたある海賊版は大抵このどちらかを盗用しているが、國分 2022 で述べたように f 系は装丁等は西北版を模倣しつつも、本文の例文・例語は出典不明のものを除けば陝西版、中でもその実質的な「増補版」から流用している。

國分 2019a で示したように陝西版は改訂により下図のような変遷を経ている。このうち C、D、B2、B3、B1 が「増補版」に当たるが、f 系の（出典不明のものを除いた）例文・例語が五つのテキストのどれに由来するのかまではまだ絞り込めていなかった。本章ではまずこの点についてテキストの比較を通して探ってみたいと思う。



比較に際してはまず「増補版」同士の異同を抽出した上で、f系の同じ箇所の表記を照らし合わせていったが、その結果f系と「増補版」との対応関係に次の四つの場合があることが分かった⁽¹⁾。

- ① f系がC、Dと一致する場合
- ② f系がB2、B3、B1と一致する場合
- ③ f系がC、DとB2、B3、B1双方の一部と一致する場合
- ④ f系が「増補版」のどれとも一致しない場合

以下それぞれについてデータを示しながら、f系が5種類の「増補版」のどれに依拠しているのかを考えていきたい。

1) f系がC、Dと一致する場合

	「増補版」			f系
ページ	C、D	B2、B3、B1	ページ	
57	日本音乐	日本音楽	53	日本音乐
94	啊闹塔太毛闹哇， <u>难歹</u> 丝咖。	啊闹塔太毛闹哇， <u>难歹</u> 丝咖。	139	啊闹塔太毛闹哇， <u>难歹</u> 思咖。

※ゴシック体は手書き文字を表す（以下同）。

上記データのうち「(日本音) 乐」はたしかにC、Dと一致するが、f系はそもそも簡体字を多く用いるので、この例はC、Dに倣ったと言うよりもたまたま一致したと言うべきであろう。これを裏付けるように次表の「(音) 乐(会)」ではB2、B3、B1と一致している。

もう一つの例は「増補版」では合成ルビ線の長短に違いがあり、f系はC、Dと同じ長い線を用いている。しかしf系はルビ線の大半に長い線を用いており⁽²⁾、やはりこのデータだけでf系とC、Dを関連付けるのは難しいであろう。

2) f系がB2、B3、B1と一致する場合

ページ	「増補版」		ページ	f系
	C、D	B2、B3、B1		
93	塔枯西一	踏枯西一	136	踏枯西一
96	音楽会	音乐会	139	音乐会
221	碁	基	202	基

3件のデータのうち最初の“踏枯西一”（タクシー）を見ると、C、Dでは一文字目が“塔”、B2、B3、B1では“踏”とまったく異なる字で、f系は後者と一致している。もしf系がC、Dからルビを流用したのなら“塔”をそのまま使う方が自然であろうから、このデータはf系がB2、B3、B1のどれかにもとづくことを示唆するものと言える。

「碁」についても同じことが当てはまるが、ただしC、Dの「碁」は中国では「棋」の異体字とされ通常は用いない上に「碁」と字体が似ているので、f系の「碁」はC、Dの「碁」が改悪された可能性もないとは言い切れない。

3) f系がC、DとB2、B3、B1双方の一部と一致する場合

ページ	「増補版」				ページ	f系
	C	D	B2、B3	B1		
204	制造	製造	製造	制造	179	制造
205	委托加工	委託加工	委託加工	委托加工	181	委託加工

上述のようにf系は簡体字を使うことが多いが、「委託加工」ではわざわざ繁体字の「託」を使っている。これはf系がDまたはB2、B3から例文・例語を流用した可能性を示しているのではないだろうか。

4) f系が「増補版」のどれとも一致しない場合

ページ	「増補版」		ページ	f系
	C、D	B2、B3、B1		
17	楽しみ	楽しみ	23	楽しみ
56	遅くない	遅くない	52	达くない ⁽³⁾
84	運轡	運転	125	运转
94	空太那	空太那	137	空太那
96	観光	觀光	139	观光
	C	D、B2、B3、B1		
177	日本丹	日本円 ⁽⁴⁾	149	日本■
179	五百円	五百丹	151	五百■
179	円	丹	151	■
181	日本丹	日本円	153	日本■
	C、D	B2、B3、B1		
207	電気溶接	電氣溶接	183	电气溶接
207	軽工業	輕工業	184	轻工业
207	炭鉱	炭礦	184	炭矿
216	事物所	事務所	196	事务所
216	圖書館	図書館	197	图书馆
219	競争が激しい	竞争が激しい	199	竞争が激い
234	電気スタンド	電氣スタンド	220	电气スタンド

f系が「増補版」とまったく一致しない場合、流用元はにわかに判定しがたい。しかしこの中にもいくつか注目すべきデータが見られる。例えば p.196「事務所」の「务」は「務」の簡体字であるから、この例語はB2、B3、B1の「事務所」にもとづいている可能性が考えられる（もちろんC、Dの「事物所」を流用しようとして誤りに気づき訂正した可能性も排除できないが）。

また p.184「炭矿」の「矿」もB2、B3、B1の「礦」を簡体字に直した可能性がある。C、Dの「鉱」は「鑛」の略字体として日本で生まれた字体で中国では用いない上に⁽⁵⁾、「矿」とも字体にやや隔たりがあるからである。もちろん中国語訳（煤矿）やルビ（炭一考一）から類推できた可能性も排除できないが、繁体字「礦」にもとづくとも考える方が自然ではないだろうか。

以上をまとめると、p.136「踏枯西一」、p.184「炭矿」、p.196「事務所」、p.202「基」

からはf系とB2、B3、B1との関連性がうかがえ、p.181「委託加工」からはf系とD、B2、B3との関連性がうかがえる。データ量としてけっして十分とは言えないが、これらを重ね合わせるとf系の（出典不明のものを除く）例文・例語は「増補版」のうち特にB2かB3から流用した可能性が高いと言えるのではないだろうか。

3. f系各テキストの特徴と関連性

これまでの考察でf系全体に通じる特徴についてはある程度明らかになってきたので、本章からは個々のテキストの特徴や差異、相互の関連性に焦点を当てて考察を進めたい。

國分2022でf系には9種類のテキストがあると述べたが、その後新たなテキストが一つ見つかり、現状では10種類に増えている。これらは全体的な特徴は共通するものの細かな点で相違があり、それによっていくつかのグループに分けることができる。それぞれの特徴や相違点については後述するが、ここではテキストの分類結果について一通り説明するとともに、各テキストに名前をつけておきたい。

計10種のテキストはまず6種と4種の二つのグループに大別できる。前者は奥付に編者として李力保民の名を挙げているので、「李」の発音Liの頭文字をとって「f(L)」グループと呼ぶこととする。一方後者は4種のうち3種の奥付に曲永紅という名が記されているので、「曲」の発音Qūの頭文字をとって「f(Q)」グループと呼ぶ⁽⁶⁾。

f(L)グループはさらに3種類ずつの2グループに分けられる。そこでそれぞれを「f(L i)」「f(L ii)」と呼び、各グループのテキストについては、例えばf(L i)グループなら「f(L i) a」「f(L i) b」「f(L i) c」のように呼んで区別する。

f(Q)グループも2種類ずつの2グループ「f(Q i)」と「f(Q ii)」に分けられる。こちらもグループ内のテキストを「f(Q i) a」「f(Q i) b」のように呼ぶこととする。

以上のようにf系テキスト10種を分類した上で、次節以降ではグループおよびテキストごとの特徴や差異、また相互の関連性について具体的に明らかにしていきたい。

3.1. f系テキストの構成の違い

まずf系テキストには構成面で下表のような違いがあり、上で述べた分類はこれを一つの根拠にしている。例えばf(L)グループとf(Q)グループでは《目录》の掲載場所が異なっている。またf(L i)グループとf(L ii)グループは本文より後の構成が異なり⁽⁷⁾、f(Q i)グループとf(Q ii)グループは《日文字母五十音图的发音》と《浊音和半浊音发音对照表》のノンブルの振り方、宣伝文の有無、本文のページ数等に違いがある。さらにf(Q ii) aとf(Q ii) bは本文より後の構成が異なる。

f (L) グループ		f (Q) グループ		
f (L i) a~c f (L ii) b	f (L ii) a, c	f (Q i) a, b	f (Q ii) a	f (Q ii) b
表紙				
表紙裏白紙				
扉				
扉裏白紙				
《前言》(4 p)		《目録》(2 p)		
《日文字母五十音图的发音》 (p. 5~11 の 7 p)		《前言》(4 p)		
《浊音和半浊音发音对照表》 (p. 12~15 の 4 p)		《日文字母五十音图的发音》 (p. 5~11 の 7 p)	《日文字母五十音图的发音》 (p. 1~7 の 7 p)	
宣伝文		《浊音和半浊音发音对照表》 (p. 12~15 の 4 p)	《浊音和半浊音发音对照表》 (p. 8~11 の 4 p)	
《目録》(2 p)		p. 15 裏白紙	宣伝文	
本文 (225 p)		本文 (219 p)		本文 (225 p)
p. 225 裏白紙	奥付	奥付	p. 225 裏白紙	奥付
奥付	裏表紙裏白紙	裏表紙裏白紙	奥付	遊び紙
奥付裏白紙	裏表紙	裏表紙	奥付裏白紙	裏表紙裏白紙
裏表紙裏白紙			裏表紙裏白紙	裏表紙
裏表紙			裏表紙	

3.2. f (L) グループと f (Q) グループについて

f (L) と f (Q) の両グループは構成の違いのほかに版面のレイアウトによっても区別できる。両者は一見するときわめてよく似ているが、仔細に観察するとわずかに違いが見られる。例えば下掲の画像では“一”の高さや“a”のフォントが異なっているのが分かる。

おそらくこの両グループの大元となる版下は別々に組まれたのではないと思われるが、一方で両者は字句や字体に違いはなく、フォントも基本的に同じものを用いているようであり、版面内の文字や記号の配置までよく似ていることから、どちらかが他方をかなり忠実に模倣したのではないかと考えられる。

なお f (L) グループでは f (L ii) a を除いた 5 種類に手書きの箇所が見られるが、f (Q) グループの 4 種類にはない。

21. 你叫什么名字?

お名前は なんとお言いますか

噢娜妈哀哇，难 (nàn) 涛。噢(空一拍)瞎衣妈斯咖。

f (L i) a (p.5)

21. 你叫什么名字?

お名前は なんとお言いますか

噢娜妈哀哇，难 (nàn) 涛。噢(空一拍)瞎衣妈斯咖。

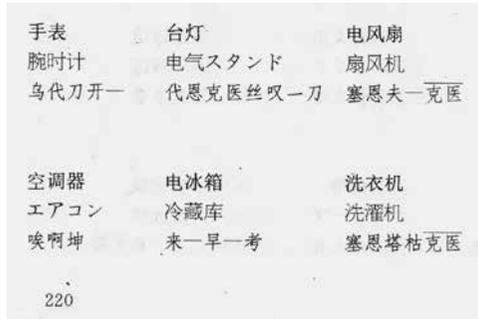
f (Q i) a (p.5)

3.2.1. f (L i) グループと f (L ii) グループについて

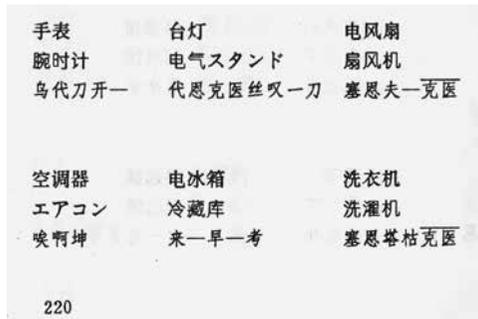
f (L i) グループ 3 種と f (L ii) グループ 3 種は以下の三点によって区別できる。

① f (L i) グループは p. 218 のノンブルの一部が手書きされている。

② f (L ii) グループは p. 220 のレイアウトが独特で、特に日本語部分の漢字に丸ゴシック体に似た活字が使われている（下掲画像を参照）。なおこのページは f (Q ii) グループとノンブルの位置を除いて同じものと思われる（3.2.2 で詳しく述べる）。



f (L i) a (p. 220)



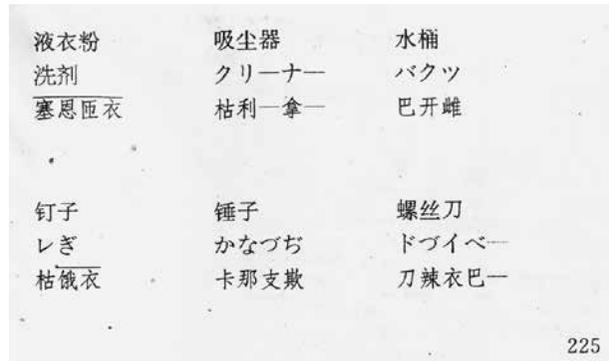
f (L ii) a (p. 220)

③共通のインク汚れや印刷不良の有無：6種のテキストの間に共通のインク汚れや印刷不良（文字のかすれ、例文を切り貼した跡の線など）があるかを目視できる範囲で調べたところ、f(L i) グループの3種にはすべてに共通する汚れ等が複数観察でき、f(L ii) グループについても同様であったが、両グループの間には見つからなかった。

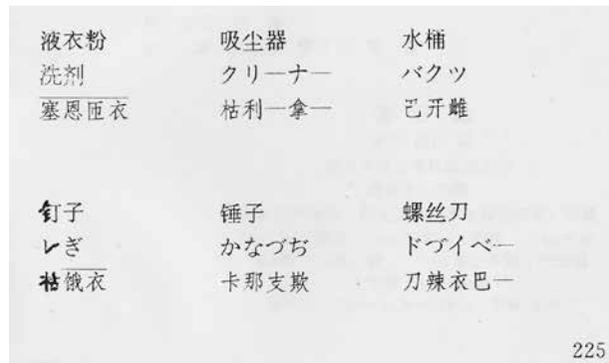
以上の特徴や相違点から、f(L i) と f(L ii) の両グループは活字にルビ線を加えた共通の版下にそれぞれ手を加えて作られたと考えられる。

3.2.1.1. f(L i) a、f(L i) b、f(L i) cについて

f(L i) グループの3種類は本文最後の p. 225 にのみ違いがある。下掲の画像から分かるように、f(L i) a は活字の版下に手を加えた形跡がないが、f(L i) b では一部が手書きされている。また f(L i) c は一部の仮名等がゴシック体になっているほか、文字・記号の配置やフォントなど細かなレイアウトが他の2種と異なっている（なおこのページは次に述べる f(L ii) b とほぼ同じものなので、画像もそちらに掲げる）。



f(L i) a (p. 225)



f(L i) b (p. 225)

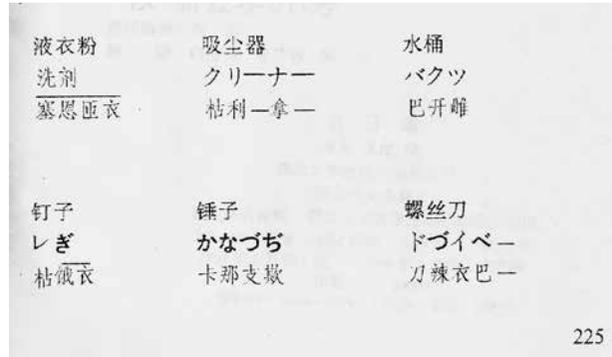
以上の特徴や相違点から、この3種ではまずf(L i) aが作られ、それを元にf(L i) bとf(L i) cが別々に作られたと考えられる。

3.2.1.2. f(L ii) a、f(L ii) b、f(L ii) cについて

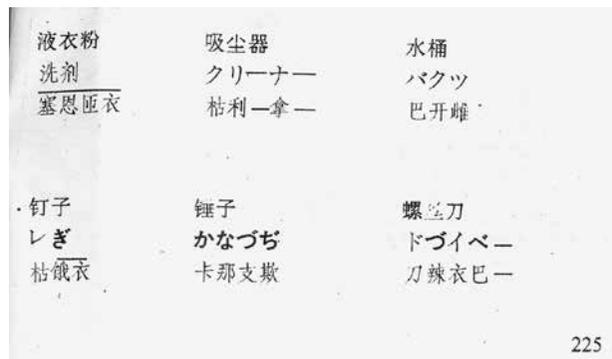
f(L ii) グループ3種のうちf(L ii) aは手書きを含めて活字の版下にあとから手を加えた形跡がない。

f(L ii) bは次の4箇所到手書きがある：① p. 73 「一時間」、② p. 177 ノンブルの一部、③ p. 190 ノンブル、④ p. 197 ノンブルの一部

また p. 225 のみ他の2種とレイアウトが異なっており、上述のようにf(L i) cとほぼ同じものであるが、「ドづイバー」の長音記号だけはf(L i) cと違い若干細いように見える（画像を参照）⁽⁸⁾。



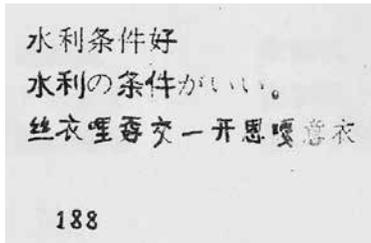
f(L ii) b (p. 225)



f(L i) c (p. 225)

なお 3.1 の表から分かるように f(L ii) b は全体の構成も f(L i) グループと同じで、両者には何らかの関連があったことがうかがえる。

f(L ii) c は f(L) グループの中で唯一手書き箇所が多い（下掲画像を参照）。その中には f(L ii) b で指摘した三つのノンブルも含まれているが、手書きされている数字は必ずしも同じものではなく、同じ数字が手書きされていても両者の筆跡は異なっている。



f(L ii) c (p.188)



同 (p.196)

また f(L ii) c は一部のページで版面とノンブルの位置関係が f(L) グループの他の 5 種と異なるほか、ページによっては印刷状態が悪く、文字がかすれたり歪んだりして活字か手書きか分かりにくい箇所も多い。p.225 にも活字か手書きか不明瞭な部分があるが、基本的には f(L ii) a と同じもののようである。

なお f(L ii) a と f(L ii) c の p.92 に「スプー」という例語があるが、f 系の他のテキストでは「スプーソ」（「スプーン」の意）となっている。この語は版面の右端にあることから、f(L ii) a と f(L ii) c では組版の際のミスにより「ソ」が消えてしまったと思われる。

以上の特徴や相違点から、この 3 種ではまず f(L ii) a が作られ、それを元に f(L ii) b と f(L ii) c が別々に作られたと考えられる。

なお以上指摘してきた点も含め f(L) グループ 6 種の主な異同については付表 1 にまとめておいた。

3.2.2. f(Q i) グループと f(Q ii) グループについて

上述のように f(Q) グループも f(Q i) と f(Q ii) の 2 つのグループに分けられるが、両者を区別するポイントとして以下の五つを挙げることができる。

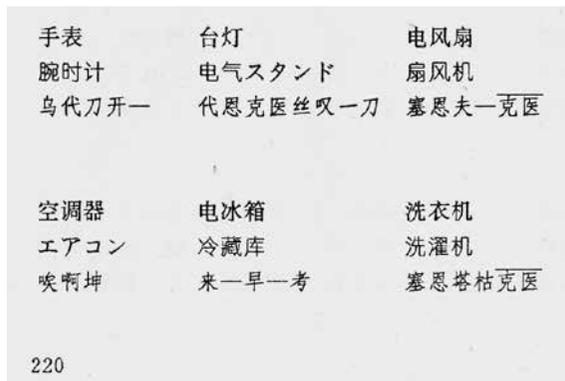
①扉と奥付の記載の違い：両グループは 3.1 で述べた構成のほかに扉と奥付の記載にも相違がある。もっとも顕著なのは f(Q i) グループでは扉に出版社として“陝西旅游出版

社”と記されているのが f(Q ii) グループでは“西北大学出版社”になっていることである。奥付は4種類とも異なるが、f(Q i) グループの2種は記載内容が陝西版に比較的近いのに対して、f(Q ii) グループの2種は西北版により近いかまったく同じ内容になっている（扉と奥付の記載内容については付表2を参照のこと）。

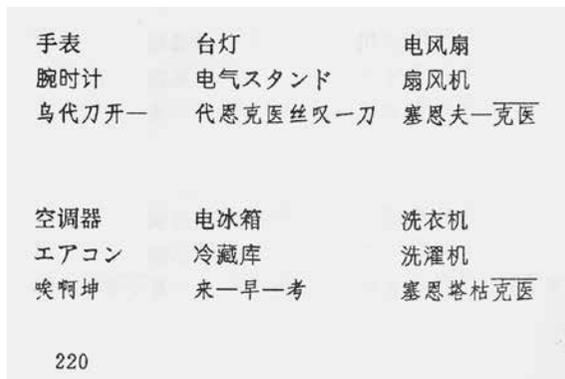
② f(Q ii) グループを含めて f 系の各テキストは本文が225ページある一方、f(Q i) グループの2種では219ページしかない。なお p.219 の裏面には奥付が印刷されているので、p.220 以降がないのは落丁ではない。

③ f(Q ii) グループは日本語部分の漢字の大半が丸ゴシック体風のフォントになっている。なお 3.2.1 で述べたように、p.220 のレイアウトはノンブルの位置を除いて f(L ii) グループの3種と同じものである（画像を参照）⁽⁹⁾。

なお f(Q ii) グループでは本文を通してこのフォントが使われているのに対して、f(L ii) グループでは p.220 にしか使われていないことから、おそらく f(L ii) 側がこのページだ



f(Q ii) a (p.220)



f(L ii) b (p.220) (f(L ii) a の画像は 3.2.1 を参照のこと)

け $f(Q_{ii})$ 側から流用したのではないと思われる。

④本文における版面とノンブルの位置関係が両グループの間で異なるページが多い。特に偶数ページ（見開き向かって左側のページ）で位置の違いが明瞭である。

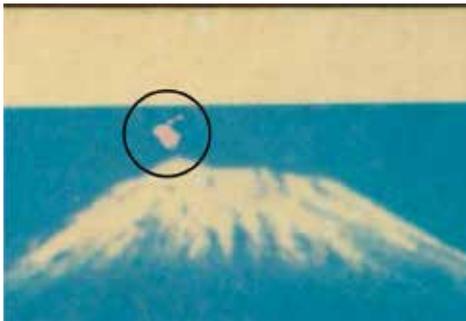
⑤共通のインク汚れや印刷不良の有無： $f(Q_i)$ グループの2種類のテキストの間には共通のインク汚れ等が複数観察でき、 $f(Q_{ii})$ グループについても同様であったが、両グループの間では見られなかった。

以上の諸点から $f(Q_i)$ と $f(Q_{ii})$ の両グループは活字にルビ線を加えた共通の版下にそれぞれ手を加えて作られたと考えられる。なお上述のように扉や奥付の記載は $f(Q_i)$ グループより $f(Q_{ii})$ グループの方が西北版に近い。海賊版の製作者からすれば本を少しでも新しく見せた方が売れると考えるであろうし、③で指摘したように $f(Q_{ii})$ グループはフォントにも一工夫した跡が見られることから、 $f(Q_{ii})$ グループは $f(Q_i)$ グループより時期的に後に作られたと推測できるのではないだろうか。

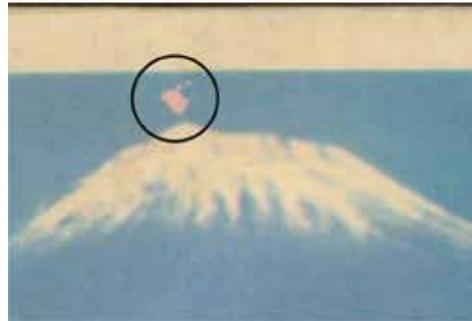
3.2.2.1. $f(Q_i)$ a、 $f(Q_i)$ b について

両テキストの違いは奥付の記載の1箇所のみで、 $f(Q_i)$ aには発行所として“陝西旅游出版社出版发行”と記されているのが、 $f(Q_i)$ bでは“西北大学出版社出版发行”になっている。相違点がこれだけではどちらが先に作られたのか決めがたいが、上で述べたのと同様に、海賊版製作者が本を売るために少しでも西北版に近づけようとしたのなら、発行所の記載が古い $f(Q_i)$ aがまず作られ、次いで $f(Q_i)$ bが作られたと考えられるのではないだろうか。

なお $f(Q_i)$ aの表紙にやや目立つ汚れがあるが、これと同じ汚れが $f(L_{ii})$ a、 $f(L_{ii})$ bにもある（下掲画像の丸で囲んだ部分）。このことから $f(Q)$ と $f(L)$ 両グループの間には関連があったことがうかがえる⁽¹⁰⁾。



$f(Q_i)$ a 表紙



$f(L_{ii})$ a 表紙

3.2.2.2. f(Q ii) a、f(Q ii) bについて

両者は3.1の表に示したように本文より後の構成が異なるほか、奥付も大きく異なる。f(Q ii) aは編者に正規版と無関係の“曲永紅”を挙げ、発行所には“西北大学出版社”、印刷所には陝西版と同じ“陝西省建筑印刷厂”を挙げており、色々な情報が混在している。一方f(Q ii) bは西北版と記載内容がまったく同じで、したがって編者もf(Q)グループの4種の中で唯一李力保民の名を記している（詳細は付表2を参照のこと）。

この二つのテキストに関してもどちらが先行するものなのか判断しがたいが、f(Q i)グループの場合と同じく製作者が海賊版をより新しいものに見せようとしていたのならば、やはり記載情報が陝西版寄りのf(Q ii) aが先に作られ、それを元にf(Q ii) bが作られたと考えられるのではないだろうか。

4. まとめ

本稿ではまず國分2022においてf系テキストの（出典不明のものを除く）例文・例語が陝西版の「増補版」にもとづくとした考察をふまえ、現在5種類あるテキストのどれに由来するのかについてさらに絞り込んだ結果、特にB2かB3に依拠している可能性が高いことが分かった。

続いてf系10種類のテキストを構成面から比較し、次いでそれぞれの特徴や差異、相互の関連性に関して以下の諸点を明らかにした。

① f(L)グループとf(Q)グループは互いに異なる版下を元に作られているものの、両者はきわめてよく似ており、どちらかが他方をかなり忠実に模倣したのではないかと考えられる。

② f(L i)グループとf(L ii)グループは、一部のページにおける手書きの有無やレイアウト、また全体のインク汚れ等の共有状況に違いがあり、両者は共通の版下にそれぞれ手を加えて作られたと考えられる。

③ f(L i)グループ3種はp.225に手書き箇所の有無やレイアウトの違いが見られる。またこれらの差異から三者の中ではf(L i) aが最初に作られ、それを元にf(L i) bとf(L i) cが別々に作られたと考えられる。

④ f(L ii)グループ3種は、手書きの有無や手書き箇所の違い、一部のページのレイアウトに違いが見られる。またこれらの点からf(L ii) aが最初に作られ、そこからf(L ii) bとf(L ii) cが別々に作られたと考えられる。

⑤ f(Q i)グループとf(Q ii)グループは、扉や奥付の記載、本文のページ数、使用フォント、一部のページのノンプルの位置、インク汚れ等の共有状況に違いがあり、両者

は共通の版下にそれぞれ手を加えて作られたと考えられる。

⑥ f(Q i) グループ 2 種は奥付の記載が 1 箇所異なり、この点から f(Q i) a が先に作られ、それを元に f(Q i) b が作られた可能性が考えられる。

⑦ f(Q ii) グループ 2 種は構成に違いがあるほか、奥付の記載が大きく異なる。またその記載内容から、f(Q ii) a が先に作られ、それを元に f(Q ii) b が作られた可能性が考えられる。

なお異なるグループやそこに属するテキストの間にも以下のような部分的な影響関係が見られることが分かった。

① f(L i) c と f(L ii) b は p. 225 のレイアウトがほぼ同じであることから、両テキストの間には関連があったと考えられる。

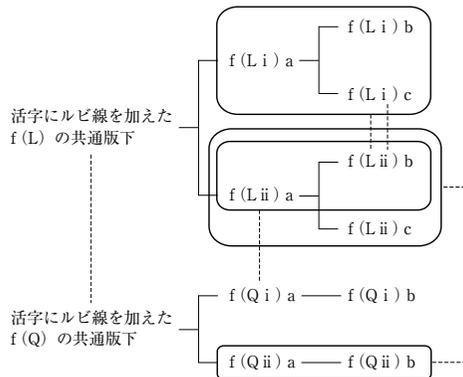
② f(L ii) b は構成が f(L i) グループ 3 種と同じであることから、両者には関連があったと考えられる。

③ f(L ii) a、f(L ii) b、f(Q i) a は表紙に共通のインク汚れがあることから、三者には関連があったと考えられる。

④ f(L ii) グループ 3 種と f(Q ii) グループ 2 種は p. 220 が同じ版面であることから、両者には関連があったと考えられる。この場合 f(L ii) 側が f(Q ii) 側からこのページだけ流用したのではないかと思われる。

このように f 系テキストはまず 2 種類のよく似た版下から 4 種類のテキスト (f(L i) a、f(L ii) a、f(Q i) a、f(Q ii) a) が作られ、次いでそこから計 6 種類のテキスト (f(L i) b、f(L i) c、f(L ii) b、f(L ii) c、f(Q i) b、f(Q ii) b) が派生し、またその過程でグループをまたいだテキスト間でも影響を与え合った結果、今分かっているだけでも 10 種類ものバリエーションが生まれることになったと言える。

最後に本稿で明らかにした f 系テキストの変遷過程を図示しておく (点線は部分的な影響関係を表す)。



注

- (1) 「増補版」における異同のうち以下の五つはf系の表記に影響しないか、f系への影響の有無が読み取れないので、本稿のデータから除外した。
- ①活字か手書きかの違い
 - ②手書き文字同士の筆跡の違い
 - ③フォントの違い
 - ④印字位置の違い
 - ⑤左右が反転した文字と正常な向きの文字の違い
- こうしたデータ抽出の基準については國分 2021 を参照されたい。
- (2) p. 19～49 の間で7箇所だけ短いルビ線が使われている。
- (3) 「込」は「達」の簡体字なので、本来は「込」とすべきである。
- (4) 「円」には4種のテキストにより、完全に手書きしたものと活字「丹」を加工したものとがある。p. 181「日本円」も同様。詳しくは國分 2021 付表を参照のこと。
- (5) 山下 2011 は、近世までの写本・版本、明治以降の印刷活字の資料に対する調査から、「鉋」の字体が1944年『明解漢和辞典』に最初に見られることを指摘し、さらに近代以降の手書きの文書についても調査し、「鉋」の使用例が明治時代の鉋山関係の文書にまで遡れることを指摘している。そして「鉋」が生まれた要因として、明治期の鉋業の興隆によって鉋山関係の語彙が増加するのに伴い、「鑛」を含む語のバリエーションが豊かになり「鑛」の使用頻度が高まったことを挙げ、画数の多い「鑛」が鉋山関係においてさまざまな字体に省略され、最終的に定着したのが「鉋」であったと結論づけている。
- (6) 残り1種の奥付には編者として李力保民と記されているが、全体の類似性からf(Q)グループに分類する(詳細は3.2.2.2で述べる)。なお曲永紅氏の経歴などは不明だが、氏を編者とする『旅游実用日語会話』(曲永紅・周小臣編、1994.4、西安外語音像教材出版社)という本を入手した。この本にはあからさまな誤植や不自然な例文はなく、内容も『説日語』とはまったく重ならない。両書の曲氏が仮に同一人物を指しているとしても相互に関連はなく、少なくともf系については名前だけ盗用したのであろう。
- (7) f(Lii)bはf(Li)グループと構成が同じだが、これについては3.2.1.2で触れる。
- (8) f(Lii)bは現在3冊所有するがすべて線が細い。一方f(Li)cは印刷の濃さによって線が太く見えている可能性もあるが、こちらは1冊しか手元になく、現状では確かなことは分からない。なおp. 225にはインク汚れ等がなく、両ページの同一性を確かめる手がかりに乏しい。
- (9) 明朝体風のフォントも所々使われているが、これらはp. 7～15、p. 64～110の間にのみ見られる。これは國分 2022 で指摘した「混成部分」(p. 1～16、p. 61～110)とおおよそ範囲が重なる。
- (10) (8)で述べたようにf(Lii)bは3冊所有しており、そのうち2冊にはこの汚れがあるが、もう1冊にはない。

参考文献

- 國分建志、2019a、「誤植の殿堂『説日語』—その誕生と変遷(八)」、『文學藝術』第42号、共立女子大学文芸学部、pp. 21-31
- 國分建志、2021、「誤植の殿堂『説日語』—その誕生と変遷(十)」、『共立女子大学文芸学部紀要』第67集、共立女子大学文芸学部、pp. 49-62

國分建志、2022、「誤植の殿堂『説日語』—その誕生と変遷（十一）」、『共立女子大学文芸学部紀要』第68集、共立女子大学文芸学部、pp.17-30

山下真里、2011、「「広」の字体について—略字体の出現時期とその要因」、『漢字文化研究』第1号、日本漢字能力検定協会、pp.25-87

付記（補足）

①正規版と異なるf系の特徴として《日文字母五十音图的发音》の「ゐ」「ゑ」「を」を除くすべての音（「あ」から「わ」まで）と《浊音和半浊音发音对照表》の「じ」の“可供参考的发音”（参考となる発音）欄にルビ用漢字の実例が1字ずつ挙げられていることを補足しておく（下掲f(Li)aの画像で楕円で囲んだ6文字がそれに当たる）。

平假名	片假名	罗马字	国际音标	可供参考的发音
あ	ア	a	a:短	(a), 汉字啊。
い	イ	i	i:短	(i), 医
う	ウ	u	u:短	(u), 乌
え	エ	e	e	(ye)的(e)。
お	オ	o	o	(ou)的(o)。
か	カ	ka	ka	(ka)或(ga), 咖或嘎

陝西版 B2

平假名	片假名	罗马字	国际音标	可供参考的发音	
あ	ア	a	a:短	(a), 汉字啊。 啊	
い	イ	i	i:短	(i), 医 衣	
う	ウ	u	u:短	(u), 乌 乌	
え	エ	e	e	(ye)的(e)。	唉
お	オ	o	o	(ou)的(o)。	噢
か	カ	ka	ka	(ka)或(ga), 咖或嘎 卡	

f(Li)a

②國分2022のp.19に陝西版とf系（本稿におけるf(L)グループ）の構成表を挙げたが、これはf(L)6種中の4種には該当するが、残り2種は本文より後の構成が異なる。本稿3.1の表はこの違いを反映させてある。

付表1：f(L) 6種主要異同対照表

ページ	f(L i) a	f(L i) b	f(L i) c	f(L ii) a	f(L ii) b	f(L ii) c	備考
70						ノンブルの位置が他の5種と異なる	
73					一時間		
92	スプーン	スプーン	スプーン	スプー	スプーン	スプー	f(L ii) aとf(L ii) cの脱字は例語が版面の縁にあるのが一因と思われる
106						ノンブルの位置が他の5種と異なる	
126						ノンブルの位置が他の5種と異なる	
138						ノンブルの位置が他の5種と異なる	
139						ノンブルの位置が他5種と異なる	
177					177	177	2種の筆跡は異なる
190					190	190	2種の筆跡は異なる
197					197	197	
218	218	218	218				3種の筆跡は同じ
219	宝一恩克要一	宝一恩克要一	宝一恩克要一	宝一恩克要一	宝一恩克要一	宝一恩克要	f(L ii) cの脱字は例語が版面の縁にあるのが一因と思われる
220				例語の漢字が丸ゴシック体風	例語の漢字が丸ゴシック体風	例語の漢字が丸ゴシック体風	
225		釘子					
225		レぎ	レぎ		レぎ		f(L i) cとf(L ii) bは
225		枯餓衣					p.225のレイアウトが他の
225			かなづち		かなづち		4種と異なる
225			ドヅイベー		ドヅイベー		

(注1) 表には各テキストの特記すべきデータのみを載せ、それ以外は空欄にしておく。

(注2) 手書き箇所はゴシック体で示す。またf(L i) cとf(L ii) bのp.225でゴシック体になっている箇所は、表ではゴシック体にアンダーラインを引いて示す。

(注3) 表中の数字はノンブルを示す。

(注4) f(L ii) cは手書き箇所が多いので、表にはテキスト間の比較の上で必要なものだけを載せ、それ以外については手書き箇所が見られるページ数のみを以下に列挙する。なお本文で触れたように手書きかどうか判別の難しい箇所もあるが、ひとまずそれらも含めておく：p.4、20、22、28、29、34、36、40、41、43、44、52、62、68、85、86、88、92、97、99、109、110、115、120、121、128、129、138、142、145、147、149、151、161、163、169、173、176、180、181、182、184、185、187、188、189、193、194、195、196、210、211、221、222、225

付表 2 : f 系扉・奥付対照表

	陕西版	西北版	f (L) 6種	f (Q i) a	f (Q i) b	f (Q ii) a	f (Q ii) b
	说日语 李保民编	说日语 李力保民编	新编说日语 李力保民编	新编说日语 李力保民编	新编说日语 李力保民编	新编说日语 李力保民编	新编说日语 李力保民编
扉	陕西旅游出版社 (陕)新登字 012 号 责任编辑: 周文	西北大学出版社 (陕)新登字 011 号 责任编辑: 张萍	陕西旅游出版社 (陕)新登字 011 号 责任编辑: 张萍	陕西旅游出版社 (陕)新登字 012 号 责任编辑: 李斌	陕西旅游出版社 (陕)新登字 012 号 责任编辑: 李斌	西北大学出版社 (陕)新登字 012 号 责任编辑: 李斌	西北大学出版社 (陕)新登字 011 号 责任编辑: 张萍
	翻译: 白全章 徐芳芳 陈云	翻译: 白全章 管芳芳 陈云	翻译: 白全章 管芳芳 陈云	封面设计: 邹笛 版式设计: 李子 责任编辑: 刘青海	封面设计: 邹笛 版式设计: 李子 责任编辑: 刘青海	封面设计: 邹笛 版式设计: 李子 责任编辑: 刘青海	翻译: 白全章 管芳芳 陈云
奥	说日语 李保民编	说日语 李力保民编	说日语 李力保民编	新编说日语 曲永红编	新编说日语 曲永红编	新编说日语 曲永红编	说日语 李力保民编
	陕西旅游出版社出版发行 (西安长安路 32 号 邮 政编码 710061)	西北大学出版社出版发行 (西安市太白路)	西北大学出版社出版发行 (西安市太白路)	陕西旅游出版社出版发行 (西安长安路 32 号 邮 政编码 710061)	西北大学出版社出版发行 (西安长安路 32 号 邮 政编码 710061)	西北大学出版社出版发行 (西安市太白路)	西北大学出版社出版发行 (西安市太白路)
付	新华书店经销 西北工业大学出版社印刷厂印刷	新华书店经销 西北工业大学出版社印刷厂印刷	新华书店经销 西北工业大学出版社印刷厂印刷	新华书店经销 陕西省建筑印刷厂印刷	新华书店经销 陕西省建筑印刷厂印刷	新华书店经销 陕西省建筑印刷厂印刷	新华书店经销 西北工业大学出版社印刷厂印刷
	787×1092 毫米 64 开本 4 印张 60 千字	787×1092 毫米 64 开本 4 印张 60 千字	787×1092 毫米 1/64 开本 4 印张 60 千字	787×1092 毫米 1/64 开本 4 印张 60 千字	787×1092 毫米 1/64 开本 4 印张 60 千字	787×1092 毫米 1/64 开本 4 印张 60 千字	787×1092 毫米 64 开本 4 印张 字数 60 千字
	1992 年 10 月第 1 版 1992 年 10 月第 1 次印刷 印数: 1-10000 ISBN7-5604-0632 -3/H·6	1994 年 2 月第 1 版 1994 年 2 月第 1 次印刷 印数: 1-50000 ISBN7-5604-0678 -5/H.28	1994 年 5 月第 1 版 1994 年 5 月第 1 次印刷 印数: 1-50000 ISBN7-5604-0678 -5/H.28	1994 年 5 月第 1 版 1994 年 5 月第 1 次印刷 印数: 1- ISBN7-5418	1994 年 5 月第 1 版 1994 年 5 月第 1 次印刷 印数: 1- ISBN7-5418	1994 年 5 月第 1 版 1994 年 5 月第 1 次印刷 印数: 1-10000 ISBN7-5604-0678 -5/H·28	1994 年 2 月第 1 版 1994 年 2 月第 1 次印刷 印数: 1-50000 ISBN7-5604-0678 -5/H.28
	定价: 5.00 元	定价: 5.00 元	定价: 5.00 元	定价: 5.00 元	定价: 5.00 元	定价: 5.00 元	定价: 5.00 元

(注 1) 比较対照のため陕西版と西北版の内容も並記する。

(注 2) 記号や線類は表に含めず、テキスト間の細かなレイアウトの違いも捨象した。